

ノーベル平和賞

パキスタンの17才のマララ・ユスフザイさんがノーベル平和賞を受賞しました。彼女は父が経営する女子学校で教育を受けていました。10才の時イスラム過激派が一時スワート県を支配して、女性が教育を受けることは罪だとするイスラム法に基づいて女の子が学校に行くことを禁止しました。

彼女は12才になると、イギリスのBBC放送にタリバンの女子校破壊を批判し、女性の教育の必要性を訴える投稿をし始めて、イギリスのメディアから注目されるようになりました。2年後に過激派が県から追放されると、パキスタン政府は彼女の本名を公表し「勇気ある少女」として表彰しました。

その結果15才の2012年10月9日、中学校から帰宅するスクールバスに乗りこんできた男たちから、彼女は頭と首に二発銃撃されました。しかし奇跡的に一命をとりとめ、イギリスに運ばれて治療を受け、健康を取り戻すことが出来ました。

彼女が銃撃された時、全パキスタン私立学校連盟会長は「マララはイスラム教に敬意を払っていない。西洋の指示に従った結果だ。欧米がタリバンと戦うために作り上げた子ども兵士の一人にさせられたのだ」と語った由。そういう見解もあるでしょう。

しかし彼女はBBCに投稿を始めた時に、このように決心したと語っています。「私を取り巻く世界が突然変わった時、私は決心を迫られました。何も言わずに殺されるのを待つのか。声を上げて殺されるのか。私は二つ目を選び、声を上げようと決めたのです」

彼女の平和賞受賞講演は、「慈悲あまねく、慈愛深きアラーの御名において」という言葉で始まっています。そしてテロに訴えて女子教育の権利を否定しようとした過激派を強い口調で非難しました。「コーランの中でアラーの神は、一人を殺せば人間性全てを殺すことと同じだとおっしゃった。預言者モハメッドも、自らも他者も傷つけてはいけない、と説いているのを知らないのですか」

この言葉は事前に委員会に提出した原稿にはなかったそうです。彼女の決意がうかがわれます。17才の少女が世界の注目を浴びて、これからどんな人生を歩むのだろうかと危惧する思いが、私の心にもありました。しかし12才で死を覚悟して、BBCに投稿

を始めたのですね。日本に暮す者には想像もつかない厳しい状況の中で、子供達も生きているのですね。マララさんの心の強さに、驚きと深い敬意を新たにさせられました。

「今は指導者たちにいかに教育が大切かを分かってもらう時ではありません。彼らはすでに分かっています。彼らの子どもは良い学校に通っています。今は彼らに行動を求める時なのです。世界中の指導者たちに、団結して教育を全てに優先するようお願いします」

彼女と共に受賞したインドのサティアーアさん 60 才も、児童労働・搾取に苦しむ子どもの救出に 40 年近くも携わって来ました。今年のノーベル賞委員会の意図を、私たちは真摯に受けとめたいものです。

マリアの信仰

イエス・キリストの誕生を祝うクリスマスが近づきました。

キリストの母マリアは、幼い時に両親と死別し、親戚に育てられたようです。村大工のヨセフと婚約し、結婚の日を待っていました。14・5 才位でしょうか。自分の家庭を持てるのです。どんなに待ち遠しかったことでしょう。ところが突然天使が現れました。「おめでとう——マリア。恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子はいと高き方の子と言われる」

これがどうして「おめでとう」なのでしょう。ヨセフとの結婚はどうなるのでしょうか。もしもヨセフに捨てられたら、その子をどうやって育てることができますか？「恐れることはない」と言いますが、か弱い娘マリアには不安と恐れにおびえずにはおれません。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」これがマリアの精一杯の抗弁でした。

天使の答えは「神の霊、聖霊の圧倒的な力に包まれて、人間の力によらずに命が授けられる。だから生まれる子は神の子と呼ばれる。」というものでした。「私は主のはしためです。お言葉通りこの身になりますように」マリアは神のお召だと悟り、あなたに全面的に服従しますとお答えしたのでした。神の子の母となることで一体どんな事が起こり、自分の生涯はどうなるのか全く見当もつきません。でも神のお言葉に従って進もうと決心したのでした。そして成人した我が子を十字架で殺される悲しみを味わいました。

12 才のマララさんも、**死を覚悟**して女性に教育をと声を上げ始めました。15 才で銃撃されました。彼女の人生にこれからも何が起こるか分かりません。**救いの道**には厳しい十字架が待ち受けています。マララさんの前途に、神のお守りを祈らずには居れません。それにしても歴史に大きく貢献した 10 代半ばの二人の少女の決断。「**幼い・若い**のにと軽視してはいけないのだ」と反省させられます。

